

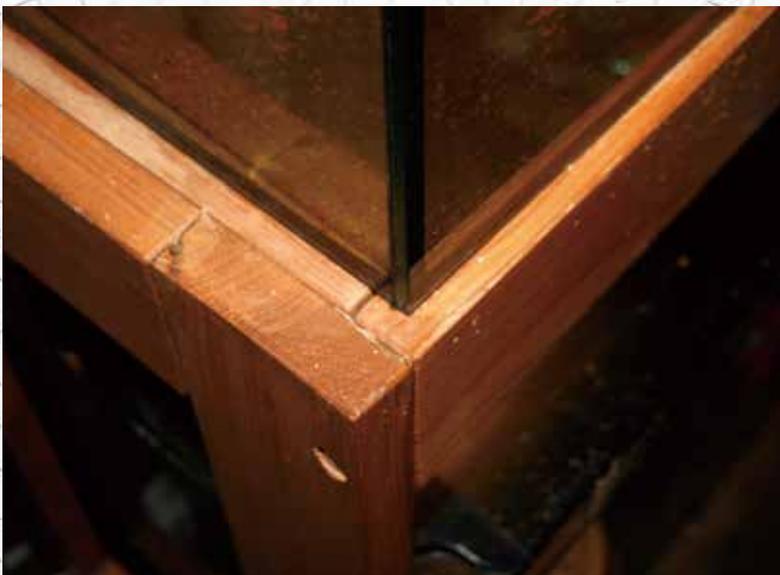
一瞬にして崩壊した筆者の家。
被災地より遠く離れた横浜です
ら、こんなありさまだったのだ



災害時の爬虫類マニュアル

文・撮影／冨水 明

正直なところ、言葉がみつからない。筆者の長いようで短い人生の中、過去に阪神淡路大震災や中越沖地震といったものを間接的に体験してきたものの、直撃とは言えないまでもこれほど大きな地震に遭遇するとは思ってもいなかった。地震、それに伴う大津波。そして原発問題と、この震災がもたらした傷はあまりにも大きい。今なお関東以北、特に東北方面では被災された方々が不自由な暮らしを強いられている現状、さすがの本誌でもそうそうおちゃらけた不謹慎な誌面は作れない。本来はまるで違う巻頭特集を企画していたのだが、大急ぎで地震を含めた緊急時のマニュアルを作ることにした。あまり生体も出てこないで「つまらん」という方々もいるだろうが、引越しや急な停電などにも対応できるであろうから、ぜひとも頭に入れておいてほしい。そして被災された方々においては、一刻も早い復興をお祈り申し上げます。



地震によってアングルから数cm移動した水槽

避難箱を 作っておこう

震災以降、いわゆる緊急避難袋が飛ぶように売れたという。我々のように「両生・爬虫類飼育」という、ある種特殊な趣味を持つものとしては、一般的な避難袋では動物までは対処できない。そこで、避難袋ならぬ「避難箱」を用意しておくことをお薦めする。実際問題として、筆者自身も飼育用品やパッキング用品をまとめた、似たようなものは用意してあったのだが、片や衣装ケース、片や発泡スチロール箱、どちらも本棚から降りそそいだクソ重い洋書の一撃で、大破した。そこで今回は、みどり商会から発売されている「GOOD LOCK」を例に用いてみた。GOOD LOCK はもちろんケージとして販売されており、その頑丈さは他の追随を許さない。上からの衝撃、横からの衝撃、落下の衝撃と、あらゆるものに強い（さすがに火には弱い）。そして、これを使った避難箱。避難する際に持っていくことも可能だが、その頑丈さから生体を詰めるだけ詰めて、家に置いて飼育者のみが逃げられるという点も重要なのである。緊急時に、はっきりいってしまえば生体は足手まといになる。また、割れたケージ、倒れたケージから逃げ出した生体が人目に触れ、いらぬパニックを引き起こすことも考えられないではない。そこで、詰められる生体はなるべく避難箱に詰め、そのまま置いて逃げるのが得策なのである。



GOOD LOCK。特にオオトカゲや大蛇系などは一般的なガラスケージから出して、こういった頑丈なものに移してから避難した方がよい。今回は寒い時期だったので、むしろ生体が冷えてしまうことばかりを考えがちだが、夏であれば割れたケージなどから屋外へ脱走してしまうことも考えられる

GOODS
2



これも 100 円ショップで売られていた保冷バッグ。たとえばヒョウモントカゲモドキや小型のヘビを 1 頭だけ飼っているというのであれば、パッキングして使い捨てカイロと一緒にこのバッグに入れて逃げるのも良いだろう。とりあえず用意しておくとう便利

GOODS
1



100 円ショップで売られていた発泡スチロール板。暑さを防ぐにも寒さを防ぐにも便利なので、何枚か用意しておくとう良いだろう

GOODS
5



ヘビやトカゲなどは布袋にパッキングするが、そのままだと重ねられないので、小さな段ボールや発泡スチロール箱を GOOD LOCK 内に入ると効率よく詰められる。また、極端な低温や高温に弱いものは直接避難箱に入れるよりも、パッキングしてから箱 in 箱の方が安全。布袋ではなく、写真のような 100 円ショップで売られている小物入れでも効率よく収納できる

GOODS
4



生体をどう入れるかは飼っている種類、頭数にもよるが、まずは一番下にはベットシートを敷く。これで、大型個体が驚いて大量排泄したときなどでも他の個体にアンモニア被害が及びにくい。両サイドの発泡スチロール板は保温、保冷のためではあるが、視界をシャットアウトし生体が落ち着ける環境を作るためでもある。同様にこれを持って避難した際、嫌いな人から見えないようにする配慮でもある

GOODS
3



新聞紙、キッチンペーパー、ベットシートなどもパッキングの際に使えるので、多めに用意しておく



使い捨てカイロはすぐに使うものは別の場所に置いておいても良いが、必ず予備をこの箱に入れておく。こうしておけば置いていくにせよ持っていくにせよ、しばらくは安全。夏場の保冷材は残念ながら電力供給がなくなれば凍らせられず無意味なので、箱に入れておく必要はない



生体を収納する布袋や洗濯ネットは予備を用意しておきたい。場合によっては汚れてもしばらくは洗えない可能性もある

POINT

今回、筆者が痛感したのは、安い衣装ケースの弱さである。特に空気穴を開けたものは衝撃に弱い。地震が来た際に冷静にパッキングができるかという不安はあるが、これはイメージトレーニングしておくしかないだろう。ちなみに、安い大型の衣装ケースにアダルトサイズのボールパイソンを数頭、直接入れると、みんなで力を合わせて（そのつもりはないだろうが）、蓋を押し上げて出てきてしまう。これは大型モニターについても同じである。そういった意味からも、生体は必ずパッキングしてから収容したい。今回の地震でも、本震ではギリギリもったが、余震でアウトという家具があった。逃げている間にせっかく収容した衣装ケースや段ボール箱、発泡スチロール箱が家具に潰されていたなどといったら泣くに泣けないだろう。まずは頑丈なケースに入れて、飼い主は安全が確保できてからゆっくり生体を確認すれば良いのだ。



完成。この状態ですぐに引っ張り出せる場所に置いておきたい。他に足すとすれば小型の懐中電灯とそれ用の電池の予備だろう

生体のパッキング

たとえば普段から飼育しているケージごと生体と一緒に避難しようと思えば、そうとう大変である。もちろん小型ヤモリやヘビのベビーなどのように小さなプラケースで飼育しているものは、そのまま段ボールに詰めるなりして移動させることは可能であるが、それでもかさばる。これは引越しのときなどでも同じだが、爬虫類本体は、たいていコンパクトにまとめられるのだから、移動の際にはできるだけ小さくパッキングしたいものである。その際、「こんなに狭いところに」とか「こんなに小さくパッキングしたら」と思う方も多いようだが、基本的に両生類も爬虫類も“肌に何か触れていて暗く狭いところ”が好きなのである。むしろなまじ明るく広いところに入れてしまうと、中でむやみに動き回り疲れ果ててしまう。ことヘビにおいてはこれが顕著で、できるかぎり小さくパッキングしてやる方が彼らには優しい。ただし、一部のトカゲではあまり小さくパッキングすると尾を自切してしまうものもあるので、そのあたりは加減を見ながら行ないたい。今回は紹介していないが、意外と厄介なのが大型のカメである。甲長30cmくらいまでは厚手の布袋にキッチリ詰めてしまおうか、新聞紙で巻いてガムテープでグルグル巻きにするなどして移動させることが可能だが、それ以上ともなると丈夫な段ボール箱や発泡スチロール箱の“真ん中”に入れ、周りにみっちり丸めた新聞紙を詰めて動けないようにするしかない。より大型のリクガメともなれば木箱かトロ船に剥きだしという方法しかないだろう。そのあたり、リクガメ飼育者は有事の際、どう移動させるかは考えておいた方がよい。



一般的にはこの丸パックに入れるのが楽である。たいてい販売時にはこういうパッキングをされるだろうから、捨てる前に洗ってとっておきたい。ただ、すぐに蓋と本体がバラバラになり、いざというときに合わないということも多いので注意



パックしたらこうして積み上げるのだが、注意したいのは蓋に穴が開いている場合で、これは重ねるとヘタしたら窒息させてしまう。本体の側部に穴が開いているかを確認しよう



いずれにしてもヘビとトカゲには布袋が便利。大きな個体には枕カバー、巨大な個体にはボックスシートなどが使える。口は縛るか、一度折ってから輪ゴムで止める



それほどケージ数がなく、かつ大きくないのであれば、水容器やレイアウトグッズをどかし、生体が無駄に動き回らないように丸めた新聞紙を詰めて、そのまま移動すると良い



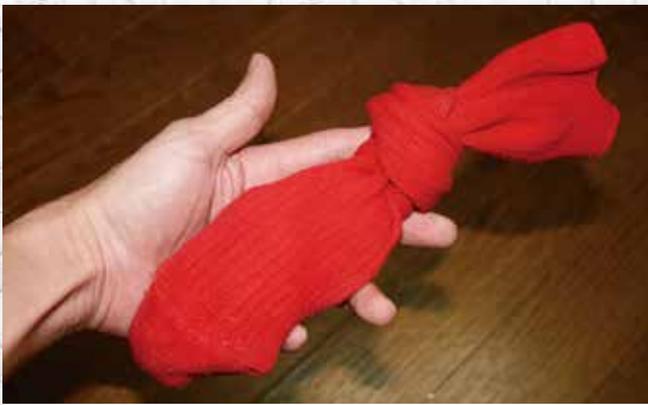
洗濯ネットを使うときは、なるべく目の細かいものを使用したい。中から外が見えると、特にトカゲはパニックになりやすい



この130cmくらいのボールパイソンでも40×50cmくらいの袋や洗濯ネットに入る



このくらいまでタイトにまとめる。イメージ的には、普段のトグロを巻いた状態が袋の中で再現できていれば良い。トカゲでは尾や胴体の柔軟度と相談しながら、小さくまとめていく



そのまま靴下を裏返してやれば良い。特に咬みつくような個体にはこの方法が楽。また、拳サイズのカメの移動にも靴下は便利。ただし、ストッキングは不可。伸びるので、いつまでも出ようとしていずれば破られる。もちろん、靴下は事前に穴の有無を確認しておく



手近に布袋がない場合は、とりあえず使えるのが靴下である。特に、昔流行ったルーズソックスなどがあれば、そうとう大きな個体も収容できる。自分から入っていかない個体は、靴下を手にはめてつかみ…



100円ショップはパッキング用品の宝庫である。別にそれで飼おうというわけではなく、あくまでも一時的なものなので、自分の飼育する種とそのサイズに合わせて用意しておくといい。これは救急箱らしい

パッキングする際に一番注意したいのは、彼ら自身の排泄物による自家中毒およびその誘爆である。そもそも移動するためのパッキングなので狭い。そして通常の飼育時よりも圧倒的に密閉度が高い。多くの両生・爬虫類は移動させると驚いて糞や尿をする。これが狭いバックの中だと、彼ら自身が死ぬほどの毒性を帯びるのだ。まして近くにカイロなどがあったら、下手をすればもの数時間で死んでしまう。そこで、バックするときには必ず厚めにキッチンペーパーやティッシュを敷いておき、汚れたらすぐに交換するようにする。同様に布袋や洗濯ネットの際も、丸めた新聞紙やキッチンペーパーを入れておくだけでだいぶ違う。また、せっかくパッキングしても逃げ出されては意味がないので、丸バックなどはセロテープで止めておくこと。パッキングする際に、何頭かまとめてバックしても問題ない場合が多いが、気をつけたいものとしてはオス同士がケンカしてしまうような種、他の個体を食べてしまう種などがある。また、意外なところでは移動のショックで発情してしまって交尾してしまうものもある。そこで、基本的にはどの種もメスはまとめて問題ないが、オスは単独にしておくというのがベストである。



これはサンドイッチ箱。中にパワーのある生体を入れる場合は、太めの輪ゴムで止めておくのが無難。基本的にどれもそう気密性はないので心配はないが、一応側面に熱したキリなどで穴を開けておくのが無難だろう

POINT

水槽および ケージセットの注意点

正直、注意点も何もあったものではないかもしれない。崩れるときは崩れる。確実に言えることは「あまり高く積むな」ということくらいであろう。しかしながら、今回の震災において筆者の例でいくつか気づいた点はあるので、それについては紹介しておきたいと思う。いずれにしても、水槽台に水槽やケージを固定するというのは無理なのである。そこで、市販のガラスケージを置く場合、しかもその水槽台が平らな板である場合、滑り止めに厚めのビニールシートを敷いておくことをお勧めする。これでケージが滑り落ちることだけはだいぶ防げるだろう。また、組み立て式のラックなどを使っている場合、通常、天板は網になっていると思う。その上に乗せられるコンパネも売ってはいるのだが、網のままでの使用がおすすめ。プラケースにせよアクリルケージにしても、たいてい底面には足がついている。どうも筆者宅では、この足が網を噛んで落下や移動を免れたらしい。また、筆者は柵を設置する際、壁にピッタリとつけずに余裕を持たせていた。この余裕部分で適度に柵本体が揺れてくれたおかげで、柵に乗っているケージ群は無事だったのだと考えられる。一方でカメ水槽などは、そもそも揺れるようなやわな水槽台は使わないわけで、そのおかげで水槽の方がズレるという事態が起こった。また、120cmの熱帯魚水槽は、水槽内に波が立ったようで10cmほど水が減り、床はグショグショになっていた。また、水槽の上部フィルターの上に置いてあったものは、ことごとく水槽の内部に落ちていた。特に、蓋をしていないカメ水槽にはプラケースいっぱいのミールワームが雪崩れ込み、大変な有り様になっていた。いずれにしても水槽周りには物を置かないに越したことはない。震度自体は今回の震災より上だった阪神淡路では、なんと水がいっぱいに入った180×60×60cm水槽がアングル台の上で数十cm横滑りしたという。気にし過ぎてもしょうがないことではあるが、特にマンションの高層階に住む人は、せめて配線に水がかからないようにするなどの対処はしておきたい。



この2段の水槽は両方ともガラス水槽であり、上段のカメ水槽は水がフルに入っていないとはいえ、通常大人の力でも動かせるものではない

災害時の 爬虫類マニュアル

After



地震後。2cm近くズレている。しかも筆者はしばらく気づかなかった。水槽はちゃんと水槽台に乗っていないと変な圧がかかり、水漏れの原因にもなるので冷や汗ものである。ちなみに下段の水槽も1cmほど動いていた



このとおり水槽と水槽台は前面でツライチになっている

Before



これだけギッシリとケージが乗った棚が無傷だったのは驚きである。ある種、運もあるし、震源地からも遠かったというのもあるが



まあ、積み過ぎなのは百も承知である(苦笑)。この大型フラットブラケースの上から4つが見事に崩れ落ち、飼育部屋ではしばらくアオジタが走り、棚の隙間からはボールが覗いているという状態になった

わかってはいても、最初から地震などの天災を前提にケージを置く人はそういないと思う。結果的に「気軽に高く積むな」くらいなことしか言えないのだが、カラーボックスの上にブラケースや市販のケージを置くというときでも、下に滑り止めシートを敷くだけでもまるで違う。また、案外大事なことだが、ケージは移動しなかったが、そこに物が降ってきて割れたという例はいくつも聞かれた。よってケージや水槽の周りには倒れやすそうな棚や家具は置かないとか、重いものをあまり高いところに置かないという配慮は必要だろう。筆者宅も冷蔵庫上の電子レンジは見事にスッ飛んでいたし。

POINT



この蓋の部分、使わないようならテープで止めてしまえば不測の事態にもかなり安心できるだろう



驚いたのは大型ブラケースの蓋の頑丈さである。1m以上の高さから落ちて蓋が外れたのは1つだけだった。それも蓋を止める爪が折れたためである。それ以外は、蓋はしっかりとついたらまま、透明の内蓋が開か外れるかして、そこから生体は脱走している。もちろん、長く使って劣化したものではこの限りではないが、この安心感は頼もしい

地震が来た！

まず一番に考えるべきことは「己が身の安全の確保」である。何はなくとも自分さえ助ければ、そのあとのことも考えられる。そして次に身内や友人、知人のことを考えつつ、我々にはやらねばならないことがある。二次災害、二次被害を出さないための行動である。爬虫類を飼っていて、普段から怖いのは火事である。そう、我々は多大な電力を消費し、また高温の熱源を使用していることが多いのだ。生体の無事のチェックなどはまずは後回し。やるべきことはただひとつ。高温の熱源を消すことだ。バスキングランプはできればコンセントから抜いてしまいたい。例えば、ケージが倒れ停電にもなったとする。このときにバスキングランプがオンになったままでいると、いずれ電気が復旧したときに、ランプも点灯する。その際、燃えやすいものが近くにあつたら大変なことである。これは水中ヒーターも同様で、小型水槽が倒れヒーターが剥きだしになったり、何かに引っ張られてサーモスタットの端子が水の外に出てしまったりということが阪神淡路のときには起きている。結果的に阪神淡路の際のこういった事件がもとで、水中ヒーターは「空焚き防止機能」付きがあたり前になっていくのだが、いまだにそういった機能のついていないヒーターを使っている人も多いと思う。とにかく、地震が来たら、まずはこのバスキングランプと水中ヒーターの電源は抜いてしまうのが安全である。電球類の熱だけで爬虫類を飼っている人もそうはいないだろうから、電気が通っているなら遠赤外線ヒーターのような高温を発しない保温器具でも最低温度は維持できる。また、揺れた際にタコ足配線が重さに耐えきれず、コンセントから抜けるか抜けないかの微妙な状態になったりする。ここにホコリでも降ってくれば発火する。コンセント類は日頃から無理な使用は避けて、定期的に安全確認をしておきたい。

こういったことを確認したら、次は脱走兵の確認である。ある意味、有事にはこの「火事の危険の回避」「飼育生体の脱走回避」の2つが生き物を飼うものの使命だといっても良い。これが避難箱を作る目的のひとつでもあるのだが、有事には当然ながら人はパニックになる。その際にそこらを見慣れないヘビやトカゲが歩いていたら、より一層のパニックが起こるし、いくら安全だ、可愛いだ言っても聞いてはもらえないだろう。我々がどんな生き物を飼うのも勝手なのだが、それが原因で世の中に迷惑をかけるようなことは絶対に避けなければいけないのだ。



保温球、バスキングランプの類は、いの一掃に消す。ミスガメなどに使っているときは水没して感電なんてこともあることだし



水中ヒーター。かくいう筆者の家のヒーターも、たしか空焚き防止機能は付いていない。また、案外怖いのは後ろに写っている水中ポンプである。地震の揺れで配管が外れ、大洪水なんていうことも起こりうる



電源は、どれがどれかわかるようにしておくのが望ましい。例えば絶対に抜いちゃいけないものには赤いテープでも貼っておくとか。また、水モノの周りに電源タップを設置している場合は、水槽からこぼれた水がかかってショートなんてこともあるので、地震直後は注意して扱う



エアコンの復旧は忘れやすい。家によっては大きな地震が来ると漏電防止ブレーカーが落ち、電気が止まる。それを復旧したとして、通常のエアコンは再度オンにしないと動かない。停電が一番頭が痛いのは、このエアコンの復旧なんである。家にいれば問題ないが、普通、働いていたらエアコンつけるためだけに家に帰るなんてこと、そうはできない



脱走兵を探せ！ ひととおり本当に危険な状態を脱したら、次にすべきは生体の指さし確認である。この際、ケージの破損や水槽の水漏れなどもチェックしたい

ここでは震災時にやるべきことを2パターンに分けて紹介しておこう。

在宅の場合

① 逃げるルートの確保

まずはこれが大事。ただし、むやみに外に出る方が危険だったりもするので、的確な状況判断を

② 電球類を消す

なにはともあれ高温になる熱源はすべて消す。もちろん家事をしていたなら、ガスなどにも注意しよう

③ 浴槽に水を溜める

マンションなどでポンプで水を送っているところは停電したら水も止まってしまうため、水が出るならとにかく最低限を確保

④ 生体の確認

まずはざっとで良い。逃げたり危険な状態になってなければ良いだけだから

⑤ このビバガを取り出す

読んでやるべきことをやろう

外にいる場合

① 火事にならないよう祈る

これは冗談でもなんでもない。家に戻るまでは何もできないわけであり、とにかく火だけは出てくれるなと祈るしかない

② 家に人がいる場合

電球類の電源を抜いてもらおう。あとは、動物に慣れている人なら何かあれば勝手にやってくれるだろうし、興味ない人には「何も触るな」と伝えておこう。知らない仕事を増やされるのは困る

③ 帰宅する

玄関を開けるときの、飼育部屋を開けるときの慎重に。すでに脱走兵がいるかもしれない。また、割れたガラスが散乱しているかもしれない。筆者は靴は脱がず上がったが

④ まずは電気周りの確認

ブレーカーが落ちていたら復旧しなければ電気は来ない。こういうときのために普段からブレーカーの位置は把握しておきたい。また、キーホルダーに小さな懐中電灯もつけておくと便利

⑤ やはり電球類

電気を復旧させたら、まずは保温球や水中ヒーター類がどういう状況かを確認。正常であっても、しばらくは余震が怖いので電球類は消しておこう

POINT

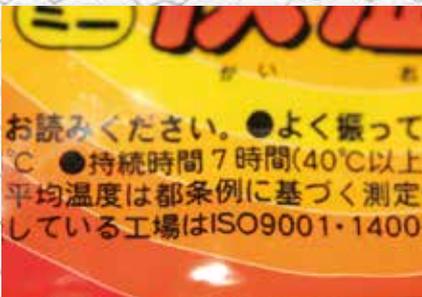
使い捨てカイロを使いこなせ！

今回の震災での被災地、および近隣の計画停電でも大活躍したのが使い捨てカイロ。もっとも、普段から生体を通販やショップで買って帰る際だとかでお世話にはなっているのだが、意外とプロでも使い方を間違えていたりする。なぜカイロを使うのか？ と考えたことがあるだろうか。これを把握し、かつ爬虫類というのがどういう生き物なのかを理解していれば、最低限使い方を間違えることはないのだが。また、カイロの仕組み、いやそんな難しく考えなくてもいいのだが、酸素を吸って熱を出すということだけ覚えていたら、自ずと使い方もわかるものだろう。しかし実際にはなかなかそのあたりは無視され、間違った使われ方をしている気がする。

まず、爬虫類は変温動物である。要するに彼らの体温は外気温に左右される。ただ、ここが両生類と違うところなのだが、爬虫類は自発的に熱源を求め、そこから熱を吸収し活動する。この熱源というのが、太陽の熱、それを受けた岩や地面である。そこから熱をもらい活動しているのだ。飼育下では太陽の熱がバスキングランプに代わり、岩や地面に残る熱が遠赤外線ヒーターだと思えばわかりやすいだろうか。ただ、もちろん自然下では曇りの日や雨の日もある。そう、太陽の熱の恩恵を受けられない日だ。ではそういう時彼らはどうするのか？ これは単に活動しないだけである。そもそも一定の温度にしておく必要のない生き物を、我々は飼っているのだ。これを理解していれば、例えば一週間くらいバスキングランプを消しておいたところで、遠赤外線ヒーターを設置して、普段から状態良く飼育しているなら何も問題ないことがわかるだろう。そこでカイロである。これは彼らが活発に動けるように「暖めるため」に使用するのではない。これ以上冷えたらまずいという温度まで「下がらないようにするため」のものなのである。熱帯性のきわめて低温に弱い種でないかぎり、ほとんどの種において18℃くらいまでは一時的に下がっても問題ない。「一応、安全面を考えて20℃くらいは最低キープしたいね」というときに使うのがカイロなのだ。



一般的に入手できるのは、この普通サイズとミニサイズだろう。数時間ならミニサイズでも良いが、真冬の停電などでは普通サイズの方が良い。ただ、後述するが普通サイズ1枚ならミニサイズ2枚の方が長持ちする



ミニサイズでは7時間しかもたないのだ。ショップで買って帰るくらいには問題ないが、停電時にはやや不安が残る



ここに注目。普通はあまり気にしないが、メーカーによって温度を維持する時間が違うのだ。通常、発送のときなどは最低でも18時間以上のもを用いる



使い捨てカイロを爬虫類に使う際にベストなのは、このように2枚重ねて新聞紙できつく巻くことである。まずカイロを重ねることでお互いに冷めるのを防ぎ、新聞紙を巻くことで表面温度を抑える、すなわち無駄なエネルギーを使わせないのである。通常、カイロの表面温度は40℃を超えるが、爬虫類に使う際、そんな高温は必要ない。24℃くらいでじっくり暖まってくれば良いのだ。そして、エネルギーロスを防ぐことで、使用時間が20時間のものでも3割増くらい長く持つのである

試しにいくつか新聞紙の量を変えて作ってみると良い。温度は厳密に計らなくても良い。しばらく放置して触ってみて、暖かいと感じればそれで良いのだ。あとは用途によって個数で調整する。また、ヘビや小型のトカゲなどではより暖かい場所に行こうと新聞紙の中に入り込み、そのまま出られずに熱死することもあるので、セロテープで隙間を止めてしまうのが良いだろう





たとえば今回行なわれた計画停電のように3時間程度の場合、そのたびにカイロを使い捨てるのはバカバカしい。そこで、その場合はジッパー付きのポリ袋に入れ、中の空気を絞り出すようにして封をする。これで一時停止。また数回は使える。もっとも、短い停電の場合はペットボトルにお湯を入れてタオルや新聞紙を巻いてカイロ代わりにする方がお勧めである



なんだこの写真と思うだろうが、これ「命の穴」である。先にも書いたとおり、カイロは酸素を吸って熱を出す。よって密閉状態にある場所だと内部の酸素を使い果たして熱が出さなくなる。まあ、カイロが止まるだけなら良いのだが、酸素がなくなれば中にいる生き物も死ぬ。そこで、カイロは必ず空気穴の付近に貼り付けて使うのだ

保温があれば保冷もある

一般的に爬虫類は暖めなければという方向にばかり考えられがちだが、実は高温の方が怖い。徐々に冷える分にはどうにでもなるが、一気に高温になった場合は即死することすらあるのだ。特に両生類はほとんどがそういった傾向がある。よって真夏に停電などあったら、しかも閉め切った狭い部屋だとしたら、まず両生類は助からないと思った方がよい。夏場、しかも昼間の停電はわかっていたらクーラーボックスや発泡スチロールの箱に保冷剤とともに避難させるという方法がとれるが、もし突発的にやられたら、そうとう深刻な被害が出る。せめて窓が開けられるとかできれば良いのだが、外出していたらアウトである。現状で夏場の計画停電は中止ということにはなったが、それでも保冷剤の類は準備しておくに越したことはないだろう。使い方、考え方は基本的に使い捨てカイロと同じである。あくまでも間接的に冷やすということをお忘れなく。

実は今回の計画停電時においても保冷剤は重要であった。そう、冷凍餅である。3時間とはいえ冷凍庫が止まれば中のものは溶け始める。そんなときに保冷剤と一緒に入っているだけで、持ちがまる違うのだ



水生有尾類などには凍らせたペットボトルを定期的投入するといった方法でも乗り切れる。これはエアコンのない両生類飼育者にも使える手で、ペットボトルにタオルを巻いて、そのままケージの中に入れておけば良いのだ

次のページで具体的な使用法を説明していくが、まずはカイロの基本的なことをおわかりいただけたらどうか。「暖める」のではなく「冷やさない」。これはしっかり頭に入れておいてほしい。たまに見られるが、カイロの上に生体が入ったカップを乗せてしまう人がいる。これ、一歩間違えばカップの中の生体は数時間で死んでしまう。カイロを使うときは、あくまでも間接的に、かつ直接触れさせないというのが大事なのである。これは保冷剤も同じで、直接触れたら彼らは急激に体温が下がって動けなくなってしまう。特に狭いケージ、狭いカバン、狭い袋の中では注意が必要。

POINT

こういうタイプの保冷剤もまたタオルや新聞紙などを巻いて、少しでも長持ちするようにして使おう。100円ショップなどでも売られているので、いくつか買っておくとうまいだろう



カイロ実践法

さて、いざ停電になったとしてカイロを実際に使うわけだが、ここでは単にカイロと書いている場合、2枚重ねのものを新聞紙で巻いたものを1個と考える。ついでに言えば、貼るタイプのカイロはもっとももたないので、筆者は数時間の場合しか使用しない。と言っても、貼るタイプでも2枚貼りあわせるとそれなりに持続はするのだが。

いずれにせよカイロの使用法には2つある。まずは間接的に使用して、その空間の温度を高めるもの。この場合は、使用個数も増える。例えば段ボール箱や発泡スチロール箱、一番最初に説明した避難箱などの内部空気を暖め、そこに生体を入れるといったときである。もちろん外気温にも左右されるので、一概に何個必要とは言えないのだが、保温性のある箱であれば4個もあればたいはなんとかなる。まず温度が上がり過ぎるということもないだろう。このあたりは勘と経験に左右されるので、何度か家で実験しておくのが良い。基本的には二重梱包が安全かつ安心。生体をパッキングして段ボール箱に入れ、それを発泡スチロール箱に入れるといった方法である。外箱は発泡スチロール箱を使うのがベストだが、段ボール×段ボールでも、かなり違う。こうして内箱と外箱の間にカイロを入れて保温するわけだ。ちゃんとやればこの方法で2日間くらいは余裕で持つ。外箱は衣装ケースでも構わないが、通気だけは確保したい。

一方で、直接的にカイロを使う方法がある。こちらは短時間用というか、厳寒の地では少々心もとない。せいぜいがなんとか一晩乗り越えて、明日ゆっくり考えよう的な方法である。要するに、単純にケージの中にカイロを放り込み、生体の方から自発的にカイロに暖まりに来てもらうということだ。ほとんどの陸生爬虫類は温度を感知することができ、寒いケージの中でも必ず暖かい場所を探し出す。ただし、この方法は両生類を含めた水生種や多湿な種には使えない。カイロが濡れてしまえば役に立たなくなるからだ。こういった種には前者の間接方式を使うようにしたい。



ここでは単に発泡スチロール箱の中にパッキングをした生体を詰めているが、できれば段ボール箱に入れてから発泡スチロール箱に入れた方が間違いはない。写真では布袋に入った生体の横にカイロがあるが、布袋の中で動いてカイロにピッタリとくっついてしまい、低温ヤケドする（新聞紙を巻いている場合はほとんど心配ないが）ことも考えられるので、布袋が動かないように壁面にガムテープで止めてしまっても良い。また、この状態で軽く丸めた新聞紙を入れて、各々が転んだり倒れたりしないようにしてから蓋をする

ミズガメなどは小さなブラケースならともかく、まともな大きさの水槽をカイロで保温するのは不可能なので、このように他の容器に移す。この場合はカイロを床に置くと濡れてしまうので、壁面が蓋に貼り付けると良い。また、ミズヘビや両生類の場合は水苔を入れたブラケースに生体を入れ、それを発泡スチロール箱に収めて暖める。完全水生種であっても、湿らせた水苔を多めにしておけば、しばらくは持つ。ミズガメに関しては厚めに新聞紙を敷いて、それを濡らしておけば普通は問題ない。ただし、写真のような状態だとカメラが落ち着かず動き回って疲れ果ててしまうので、丸めた新聞紙をたくさん入れて、彼らがウロウロできないようにしてやり、蓋をして暗くし、安心させてやるのが良いだろう。





ブラケースなども同じで、この状態で段ボール箱や発泡スチロール箱に入れてしまうのも良い



むちゃくちゃ寒い部屋でなければ、さらにタオルをかけるだけで保温性は格段に増す



非常に簡単な方法だが、本体と蓋の間に新聞紙やキッチンペーパーを挟むだけでも、かなり保温性が違う



POINT

こういった作業をするとき、離れた所から一瞬で温度を計れるサーモガンは非常に重宝する。生体の体温の下がり具合などもチェックできるのだから。いずれにせよ温度計はいくつか用意しておいて、ちょこちょこ確認するようにしたい。また、後述するが、こういった特殊な状況の時は餌のことなど考えなくて良い。両生類にせよ爬虫類にせよ、数日食べなくても死ぬような種はそうそういない。というか、むしろ与えれば害になる。もし、不幸にもこういう状態が長引くような状況になったら、まずは数日おきに水だけ与えれば良い。そのあとゆっくりと、人に預けるのか手放すのかといったことを考えれば良いのだ。



特に昼行性の爬虫類は温度を感知する能力が高いので、適当な場所に放り込んでおくだけで良い。ケージ自体を暖めるのは難しいが、一晩くらいならこれで問題ないだろう

緊急時、餌はストップ！

これは何も天災に見舞われたとか、停電が続いたといった特殊な状況だけではない。例えば引越、例えば長期旅行前、例えば友人に預ける前日等々。いずれ移動させねばならない、環境を変えなければいけないという直前は、絶対に餌を与えてはいけない。ましてや満腹にさせるのは自殺行為に等しい。具体的に例を示すのであれば、筆者は震災以降、つい最近計画停電の中止がアナウンスされるまでの、およそ1ヵ月、我が家の生体には餌を与えていない。それはボールペンほどの太さのカリキンのベビーから、餌の消化には高温が必要なトゲオウガアナ、各種カメ、昨年の夏以来飼育しているヒョウモントカゲモドキと、種類もサイズも様々であるが、すべてストップである。これには理由がある。計画停電もそうなのだが、なにより節電する必要があったので、部屋の設定温度を23℃まで下げ、バスキングランプを消してしまったからだ。もちろん、妊娠しているヘビなどには遠赤外線ヒーターを用いたが、その程度である。そう、温度を下げたから餌を与えなかったのである。変温動物である爬虫類は温度が下がれば活性が鈍る。そういった状況で餌を与えて食べたとしても消化不良を起こす可能性が高く、そちらの方が怖い。活性が鈍っているから、もちろんエネルギー消費も少ない。ゆえに痩せもしない。ベストな温度にして餌を与えなければ痩せる。しかし、温度を下げてしまえば単に活性が鈍るだけなのだ。昨年の真夏に筆者宅のエアコンが壊れた。あの猛暑にである。頼んでも新しいエアコンが来るまで2週間かかった。修理を頼んだりもしたが、およそ1ヵ月間エアコンのない暮らしを強いられたのだが、このときも筆者は生体に餌を与えなかった。暑すぎるときも危険なのだ。同様に移動させなければいけないとか、引越しか、そういったことが決まれば、だいたい1週間前には餌をストップしてしまう。移動のストレスやショックで吐かれて体力を消耗させるのが嫌だからだ。また、長期にわたって家を空けると、給餌は出かける3日前までには終わらせ、その後数日様子を見てから出かけるようにしている。しばらく餌を与えられないからと普段より多めに与えて、留守の間に吐かれたり消化不良を起こされたりしたら手の打ちようがない。両生類にしろ爬虫類にしろ、普段ちゃんと餌を与えていれば、1週間くらいはなんの問題もない。場合によっては1ヵ月くらい平気である。「普段の飼育はしっかりと。手を抜くとは抜く」というのがある意味、爬虫類飼育の極意なのかもしれない。

緊急時のお世話

現状では関東地方の計画停電も中止になり、言われていた夏の停電も回避された。これは喜ばしいことではあるのだが、被災地では電気、ガス、水道といったライフラインが未だ不安定であることには変わらない。そして何より、日本は地震大国なのである。日本に住んでいる以上、どこにしようが今回の東北地方の方々と同じ思いをする可能性は十分にあるのだ。もちろん、そういった天災じゃなくとも、工事の関係、引越などにより、停電や通常とは違う状況を迎えることがある。そこで、緊急時の一時的な飼育方法は覚えておいて損はないはずだ。常日頃、本誌では「ベツ的に飼うのは構わないが、最低限自分が飼育している生き物の産地やその環境、生態なんかは覚えておいた方がいいよ」と書いているわけだが、そういったことが必要になるのは、まさに緊急時なのである。今回の計画停電でも関東地方の方々に「3時間も電気が止まったら、うちの手が死んじゃうんじゃないか」とパニックになった人が少なからずいる。だが、冷静に考えてほしい。それまで暖まっていた部屋が3時間でどれほど温度が下がるか、さらに暖められていたケージがどれだけ下がるのか、そしてここが重要なのだが、温度が下がるとその個体は本当に死んでしまうのか？ 実は筆者を含め、周りの友人たちは3時間の停電について「何かする？」という問いに「特に何も」という答えのみだった。筆者が唯一考えたのは「抱卵してるボールと、すでにふ卵器に入っているボールの卵にはカイロを入れよう」というだけであった。現在筆者宅にはベビーサイズのヘビやヒョウモントカゲモドキを始め、50頭前後の爬虫類がいるのだが、結論は「まあいいや。死なない」というものなのだ。両生類、爬虫類は案外死なないものである。少なくとも電気が止まれば酸素供給という命綱が断たれてしまう熱帯魚飼育者よりは、我々はずっと気楽な立場にいるのだ。しっかりと彼らを理解していれば、パニックになる必要もないし、今回のこの1冊を読んでいただければ対処だってできるはず。彼らに対する理解を含め、次またいつ来るかもしれない不測の事態に備えてほしい。

緊急時の給餌は自殺行為である。彼らは体温を維持するのに多大なエネルギーを使う哺乳類や鳥類とは違う。別に毎日食べなくても生きている身体なのだ



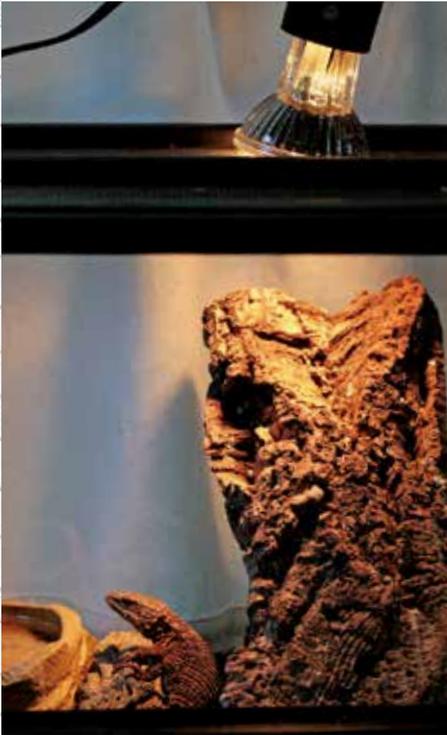
節電の話 その1

我々にできる一番簡単かつ有効な節電はバスキングランプを消すことである。爬虫類の器具の中でもっとも消費電力が大きいから。別に未来永劫点つけるなどと言っているわけではない。前述したように、もともとが毎日毎日決まった時間照射しなくても良いのだ。曇りの日もあれば雨の日もある。ショップのように売れるまでのキープであれば、一気に状態を上げなければいけないわけだし、それを売れるまで維持しなければいけないわけだから、そう節電する必要もないと思う。その分、看板の電気でも消しておけば良いのだから。一方で、個人の飼育で仕上がった個体に関しては、1日おきでも2日消して5日点けるでもいい。夜間は電力が余るから、しばらくの間だけでも夜中バスキングさせて、朝から夕方まで寝てもらったって構わない。勘違いしている人も多いようだが、まるまる1日節電する必要はないのである。電気は溜めておけないし、かならず余る時間帯があるのだ。そこで消費する分にはまるで問題はない。

もう一つ電気を食うのが水中ヒーターである。これは場合によっては200Wが数時間通電しっぱなしなんてこともある。だが、切るわけにもいかない。どうするか？ せめて設定温度を2~3℃下げることだ。筆者などでもそうだが、たいいてい水温の説明をするときは、やや高めに書いてある。これ

は高い方が活性が上がり、環境に慣れるのが早いという点からである。ゆえに、低温に弱い種でもないかぎり、数℃下げたところで問題ない場合が多い。下げた途端に皮膚病が出たとかいうのなら、すぐに戻す必要があるが、様子を見て問題ないようなら、下げるに越したことはない。これは魚などでも同じなのだが、導入直後、または飼育者自身の飼育スキルがまだ低い場合は高い温度で飼って活性を上げ、生体が落ち着き、飼い主も慣れてきたら温度を下げるというのは、ある種の長期飼育のコツなのである。高温で飼って調子を崩したら、それ以上は上げられない。やや低めで飼っておけば、何かあったらまずは温度を上げることでなんとかなる場合も多いのだ。こういった災害時は、ある種、自分の飼育スタイルを見つめなおす、よい機会でもある。

バスキングランプの点灯を不定期にすることによって、より自然に近づき、繁殖行動を起こすこともできるかもしれない



生き物と一緒に避難するときなどはペットボトルに水を詰めて、とりあえず1本持っておくと良いだろう

水だけは気を抜かずに

さて、餌に関しては手抜きのできる爬虫類だが、重要なのは水である。両生類にいたっては、まさに命の水である。多くの爬虫類が絶食には耐えられるが、水切れは怖い。その場では問題なくとも、気がつけば水分不足から腎臓を痛めてしまったりなんてこともある。よって、どれだけ世話ができない状況であっても、水だけは数日おきに与えてほしい。特に多くの種において、幼体の水分不足は致命的になりやすい。水と言えば、現在関東および以北では放射線の問題がついてまわるのだが、ひとまず爬虫類や両生類に関してはそう気にする必要はないだろう。というか、ペットボトルを買ってへびに飲ませるくらいなら被災地に回してやれよと筆者などは思ってしまふ。どこまでいっても優先すべきは人間であろう。

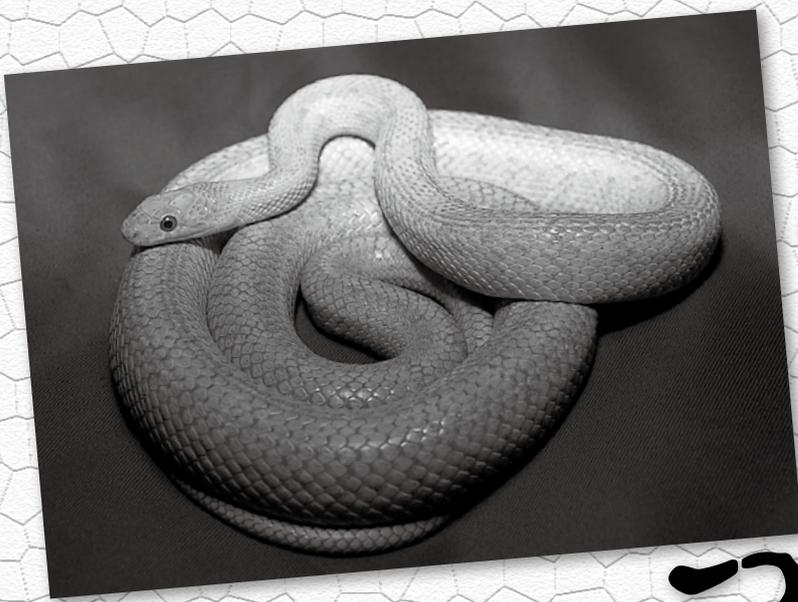
節電の話 その2

次なる節電は照明である。昨今は省電力の電球や蛍光灯が多いとはいえ、数があればそれなりに電力を消費する。特に単なる観賞用の照明なら、せめてこの事態が落ち着くまでは消しておくのが良いだろう。むしろ、ヘルツの違う西日本の方々は、そこまで気にすることはない。むしろ経済を活性化させるために東日本よりもお金を使っていただきたい。いらぬ自粛などされたら、経済活動が滞って日本自体がダメになってしまいかねない。閑話休題。では、照明の中でも紫外線はどうなんだろうという人もいると思う。これに関しても温度と一緒に、毎日何時間と決めて照射する必要はない。そもそも、毎日決まった時間に何かをするというのは、あくまでも人間様の都合なのである。そうした方が「わかりやすいから」というだけだ。もちろん自然下でも日照時間というのはおおよそ決まってはいるが、それだって毎日同じなわけではない。紫外線の照射を1週間やめたからといっていきなりケル病になるなんてことはありえない。長い目で見れば問題はあるが、それを数日行なわなかったからといって、どうということはないのだ。むしろ、この機会に自分自身の飼育スタイルを見つければいいのではないだろうか。筆者自身、なんとなくエアコン

単なる照明ならとりあえず消してしまおう。逆に部屋の電気を消して、ケージ類のライトの間接照明で暮らすというのもありだろう



の設定は28℃と疑わずずっと決めていたが、現在ちょっとずつ上げており、生体の様子や餌への反応、糞の状態などを考慮しつつ、冬場26℃、夏場は29℃くらいでなんとかするんじゃないかと模索中である。そんなことを考えるのも爬虫類飼育の醍醐味である。



文／富水 明

災害時の 爬虫類 補足編 マニュアル

震災から1ヵ月が過ぎ、本来ならそろそろ落ち着いても良いものだが、
あいかわらず原発問題は深刻化し、
さらにかの震災により日本全土におけるプレートの変動で、
現状では「いつ他の地域でも大規模地震が起きてもおかしくない」という状況にまでなってしまった。
備えあれば憂いなしとは言うものの、実際に備えてどうにかなることは少ない。
今でもちょっと大きめの余震が来たらアワワワとなる程度なものだ。
それでもやれることはあるだろうし、やらなきゃいけないこともある。
そう、我々はちょっと人とは変わった趣味を持っているのだから

爬虫類という生き物を信じてほしい

「避難箱」というものを提唱したわけだが、ある意味、数あるペットと呼ばれる生き物の中で、こういう方法がとれるのは、我らが両生・爬虫類だけなのである。ある意味「爬虫類で良かった」と思っただけなのではないか。考えてみてほしい。犬や猫を、鳥を、小さな箱に詰めて置き去りにして、彼らが生き残る確率はどれほどあるのかを。哺乳類や鳥類といった“暖かい生き物”は、じっとしていても体温を維持するためにエネルギーを消費する。我々人間とて同じで、何をしても食事というエネルギー補給をしないことには生きていけない。もちろん恒温動物であれ、その生き物の種類ごとに絶食に耐えられる期間は違うであろうが、それでも低温下で水も食料もなければ、そんなにもたないことは想像がつくであろう。

そこで両生・爬虫類である。彼らは変温動物だ。彼らの体温は、基本的に外気温によって左右される。温度が上がってベストな状態になれば餌も食べるし活発になる。一方で温度が下がれば、動かなくなるだけである。そして動かなければエネルギー消費をしないのである。無論、種類によっては温度が下がりすぎれば呼吸すら止まる。そう、死んでしまうわけだが、通常、我々が扱っている生き物たちは、徐々にであればたいていは15℃く

らいまでは耐えられるのである。そして低温下ではお腹も空かないし、そもそも食べないのである。よって、温度を下げ、暗くし、動き回らない狭い場所に入れておけば、あとは最低限の温度さえ維持してやれば、多くの種類が1週間くらいはなんとかなってしまう。要するに上手に使い捨てカイロを用いれば、それを交換するだけで、急場を凌げるのである。とにかく最悪の状況だけを回避すれば、その後のことは手の打ちようがあるだろう。例えば、交通網、輸送網が復活した瞬間に、被災していない友人やショップに避難箱に新聞紙でも巻いて見えないようにしてから送ってしまうとか。長期戦になりそうなら、それこそ人に見えないようにして避難所に持ち込めば良い。あくまでも「人に見えない」「見せない」が前提ではあるが。

注意してほしいのは「暖めない」ということなのだ。なまじ体温を上げてしまうと彼らは行動を開始して、疲れてしまう。行動できず、かと言って死なない程度の温度の維持。「暖める」のではなく「死んでしまうほどには冷やさない」という感覚である。もちろん、温度を下げれば状態を崩す個体もいるだろう。しかし、あなたさえ助けられれば、そんなものはあとで立ち上げられるのではないかと。まず、自分自身が助かることが最優先である。

基本的には置いていく覚悟を

仮に、震災が起きて避難所に行くことを余儀なくされた場合、我々はこの飼育動物たちをどうしたら良いのだろうか？

答えは「逃げられない状態にして、置いていく」である。おそらく「この子たちは私のかけがえのない家族です」という方々もいると思う。だが、その家族は他の大多数の人に嫌悪感を与える家族であることを忘れてはいけない。現状、被災地では、社会的に認められているはずのペット、愛玩動物の2トップ、まさに家族であり伴侶であるはずの犬や猫ですら、問題になっている。どんな状況であろうとも、人間社会というのができているかぎり、人命が優先であり、それ以外は2の次、3の次である。そして、緊急時に2と3は切り捨てられるのが普通である。ましてや爬虫類。一般の方の順位でいけば、おそらく1万番目くらいであろう。むしろ「んなもん、いらないだろ」と言われてお終いだ。

こういったことから、今回「避難箱」というのを考えたのである。ケージが潰れ、中の生体も死ぬのであれば、冷たい言い方だが、それはそれで良い。やはり考えるのは「脱走」なのである。これだけは何をおいても避けなければいけない。

震災から復興し、世の中が落ち着けば我々はまた今までどおりに趣味をまっとうする。その際に「地震のときに大蛇を見た」だとか「巨大なトカゲが歩いていた」となれば、そこに尾ひれがつき、ヘタしたらお頭までつき、「人が襲われた」くらいまでの話になる可能性がある。当然ながら事実確認はできないだろうが、そんなときに行政がとる対応は、より規則を作り法律で縛るとい形になる。現状でもややこしいのに、これ以上法律を増やされたらたまったものではない。若い読者や新たにこの趣味に入ってきた人はご存じないかもしれないが、ボア・コンストラクターという、おとなしく美しい魅力的なヘビは、逃げた個体がたった一度、人に踏まれて怒って咬んで、危険動物になったのである。平和な時期でも、たった一度の事件で危険動物に指定されるのだから、有事のときなどは「もう爬虫類まとめて危険でいいんじゃないの」なんてことにまでなりかねない。よって、家を離れなくてはいけない状況になったら「逃げられない状態にして置いていく」という道を選んでほしいのだ。

発送

さて、読解力を鍛える時間だよ（苦笑）。いろんな事情で生体の維持がままならなくて、遠隔地の友人などに爬虫類を送らねばならなくなったときにどうするか。“本当は”多くの宅配便やゆうパックは生き物を送ってはいけないのである。まあ、生体を宅配便で発送している人などいないだろうが、20ページの写真のように発泡スチロールに詰めて、カイロを入れて（夏場なら保冷剤を入れて）送ったりはしちゃいけないし、参考にしてもらっても困る。送り状の品目のところには、もちろん「ヘビ」とか「トカゲ」なんて書いてはダメで、普通はこの時点で営業所に断られる。だからといって「観葉植物」とか「高級洋ラン」とか「精密機器」「電球」といった大事にされやすい名前を書いたり、はたまた食材として「活スッポン」「活ドジョウ」などと書いて送って良いわけではない。ちなみに「活蟹」と書いて送ったら、サービスでクール便にされて大変な思いをした人もい

るそう。あくまで噂だけ。箱には「直射日光厳禁」とか「室内で保管」とか書いても、そうしてくれるかはわからないけど、ただの箱じゃ寂しいから書いてみたりもする。旅は短い方が疲れないから、なるべく遅い時間に出荷して、行く先には午前中に到着するのが良いね。なんだったら営業所で止めて取りに行く方が安全なこともあるね。まあ、生き物は送っちゃいけないから、そんなこと知らないんだけど。また、近年は航空便はランダムに荷物を止められるし、何より使い捨てカイロが引っかかるので、陸路にするしかないんだけど、まあ、生き物なんか送らないからねえ。いや、くれぐれも書いておくけど、食材以外の生き物（なぜか熱帯魚や観賞魚は大丈夫なことも）は送っちゃダメなんだからね。正式にはたしか西濃運輸の小動物便だけはず。まっ、真面目な読者は送らないもんね（棒読み）。

パッキングの際の注意

通気性の悪いプラカップや100円ショップなどで売られている小物入れに生体をパッキングするときに注意したいことがある。まず、彼らが呼吸する際、吐く息の中に水分が入っており、それにより案外蒸れるということ。まあ、呼吸による水蒸気程度であれば、キッチンペーパーなどの吸湿性の床材を厚めに敷いておけば、蒸れの回避はできる。問題は尿だ。それもヘビやトカゲの尿。本来、彼らは尿酸という形でチョーク状の塊を排出する。ほんのちょっとの液体と白い塊というのが正常なヘビの

尿なのだが、驚いたりストレスを感じたりすると、まだ尿酸になっていない状態というか、ほぼ液体の尿をしてしまう。これを通気性の悪い中でやられると、自分自身がそのアンモニアで中毒を起こしてしまうのだ。実は彼らの完成された尿はそれほど臭くない。匂いがきついのは、この未完成の液体尿なのだ。これは気づいたらすぐに床材を換えないと危険。特に小さくパッキングしているときは、気をつけたい。

そのとき富水は ～震災当日～

筆者の知人にも実際にもろに被災した方もいるのだが、さすがにまだ生々しすぎてそれを書く気にはならない。そこで、ただか東京で地震にあった筆者のぬるい体験談を書いておく。別に生き物には関係ないが参考になることもあるだろう。

3月11日の震災当日、筆者はトレンパーと一緒にいた。5日のトレンパーナイトを終え、その後大阪、京都と観光に行き、10日に横浜の筆者の家に泊め、11日に帰国という流れだったのだ。ラストナイトで朝まで飲んで、お互い凶悪な二日酔いのまま、ちょっとした用事のあった新宿経由で成田空港に行く予定を組んでいた。湘南新宿ラインで新宿駅のホームに降り立った瞬間、筆者は眩暈のようなものを感じ、瞬時に上に物のない場所にトレンパーを引っ張り込んだ。当然ながら何もわからないトレンパーが何か言おうとした瞬間、物凄い衝撃とともに地面が揺れ、思わずよろけたほどだ。ホームから見える高層ビルが飴でできているかのようにグニャグニャと揺れている。背後の壁がメキメキと音を立てているのがわかり、ならばとトレンパーの腕をつかみ、目の前でゆりかごのようにになっている電車に飛び込む。少なくとも落下物が無いだけ車内の方がマシだろう。ホームや車内には絶叫が飛び交っている。横を見たらトレンパーは泣いている。

揺れが収まった瞬間、大パニックになっているトレンパーに「まあ、日本ではよくあることだ」と嘘をつく。さすがにこれほどの揺れは筆者も経験がない。これは洒落にならんことになる、と判断し、トレンパーに「コムダウン（落ち着け）」と声をかけつつ、電車から降り、ダッシュで改札を抜ける。駅の中に閉じ込められたら何もできない。西口改札から出ると、駅から出ようとする人と、これから乗ろうという人で大パニック状態。その人波を抜けて都庁方面に向かうと、そこらじゅうにしゃがみこんで泣きじゃくる女性の姿が。なんとか目的地にたどり着き、用事を済ます。ふと後ろを見るとトレンパーも座って泣いている。近くに喫茶店があったので、ひとまずそこに入り、あきらかに恐怖で低血糖を起こしているトレンパーにケーキを食わす。その間に筆者はコンビニに走り、携帯の充電器と電池を購入。喫茶店に戻ると、泣きながらケーキ食ってる巨大な白人（笑）。思わず笑ってしまう。しかし、ここからは情報戦。店内にはラジオが流れているので、最低限の状況はわかる。この時点で携帯電話はいつながらない。ふと見ると喫茶店の横に公衆電話。ラッキー！ 筆者は何かのときのためにと今どき使わないテレフォンカードを、しかも北新地の飲み屋のママにもらったものを忍ばせていたのだ（まあ、実際はヘビの強制給餌に使うために持ってるんだけど）。すぐに身内の安否を確認し、あとは小銭もカードもなく公衆電話の周りで困っている人たちに、そのカードを「自由にどうぞ」と渡して喫茶店に戻る。

ラジオから流れる情報をトレンパーに伝える。「ツナミ カミン」「リル ピーポー デッド」「オオツナミ カミン」「メニーピーポー ダイ」と刻一刻と悪い方向に展開していく状況。その頃には喫茶店は満席で列まででき始めていた。トレンパーを残して駅に戻り電車の確認。当然ながら全線ストップ。駅にはシャッターまで下りていた。さてどうする？

幸い、なぜか mixi だけはつながる。ここで情報収集。たま

たま友人が世田谷にいることが判明。トレンパーをこのままにしておくわけにはいかないので、友人に新宿まで車で向かってもらうことに。今夜は高円寺の実家に避難するしかないだろう。と、同時にトレンパーの飛行機をチェックするも、電話はいつながらない。その後、本来なら20分もあれば着く距離を4時間かけて友人が到着。高円寺に向かうも、道は大渋滞。歩道にはあきらめて徒歩で家路に急ぐ人の群れ。筆者自身もようやく一息ついた感じで、車窓から外を眺める。信号が止まっている場所もあるのに、みな横断歩道では立ち止まり、なんとなく秩序が生まれている。営業している通り沿いの飲食店には「トイレ自由にお使いください」という貼り紙が。車は車で、大渋滞にも関わらずクラクションの音が聞こえない。混乱する交通の中、入ってくる車には道を譲り、ゆるゆると流れは進んでいく。やはり20分ほどで着く距離を2時間以上かけて送ってもらい、なんとか実家に到着。本当に助かった。でっけえ白人に驚く家人を横目にテレビの映像に釘付けになる。これまで音声情報と文字情報しかなかったところに、あんな視覚情報が入ってくるのだから、言葉も出ない。トレンパーは口をバクバクさせながら「オーマイガー」と力なく繰り返すのみ。それはそうだ。ほとんど地震のない国からやってきて、こんなのにぶち当たってしまったんだから。彼にはこの世の終わりの光景に見えていただろう。そしてヨレヨレになったトレンパーを寝かし、筆者はさらにテレビに釘付けになる…。



真夏の想定

不幸中の幸いといっちは不謹慎なのだが、今回の震災は寒い時期であったから、爬虫類に対する対策をいくつも練れた。ただ、これが真夏だったらと思うとゾッとする。避難箱に詰めたとして、よほど涼しい場所に置かないかぎり、閉め切った部屋などに置いていたら、あっという間に全滅させることになる。基本的に温度を下げるとなると、電力を使う以外には無理である。風通しの良い日陰があればベストだが、住環境によってはそんな場すら確保できない。いま筆者が住んでいる家にしただけ、まず日陰がそもそもない。屋外飼育のカメなどは、水場がどれだけお湯になろうが陸場に風が通っていて、そこにスタレでもかけて直射日光を遮ってやれば、高温に弱い種でもなければなんとかなってしまう。だが、こういうときにヘビやヤモリといった夜行性の連中は弱い。むろん、アゴヒゲヤラトゲオアガマなんていうもともと高温好みの奴らであれば、通気さえ気にしてやれば問題はないだろう。筆者は過去にエアコンの故障と貧乏が重なり、ひと夏をエアコンなしで過ごしたことがあるのだが、そのときに生き

残ったのは、いわゆるボア・パイソンとオオトカゲの類だけだった。ナミヘビはことごとく状態を崩し、最終的に30頭以上をバタバタと殺すことになった。別にアジアナットといったもともと高温に弱い種を飼っていたわけではない。コーンやキングといった“丈夫な”一般的な種である。そんな彼らも耐えられないほど日本の夏は暑いのだ。

いずれにせよ夏場に震災が起これば水不足はより深刻になるだろうし、過酷になることが想像できる。爬虫類たちもなまじ温度が上がっているので活発に動き回ってしまい、消耗も早い。ある意味、無策なのだが、想定しておくのであれば、パッキングの際にとにかく風通しのよいものを使用することだろう。今回使っているような半透明の小物入れなどよりも、藤でできた籠であるとか、そういったものが有効になるだろう。また、布袋に詰めた生体も平置きするのではなく、グリーンパイソン飼育でやるように避難箱内に平行に棒を渡して、そこにぶらさげて風通しを良くするという配慮が必要になるだろう。

そのとき富水は ～震災翌日～

憔悴しきったトレンパーが目を覚まし、本人曰く「古い機関車なみ」のトレンパーのイビキで眠れなかった筆者は、迷っていた。すべての情報を開示するのは得策ではないのではないかと。ただでさえ地震でパニックになっている外国人に原発の問題を伝えて良いものかと。そんな筆者の気持ちも知らず、とにかく早く帰りたいトレンパーは「空港に行くのぢゃ」の一点張り。まず、空港が動いているのかも確認がとれず、それ以前に空港までの電車が動いているかもわからないときに、駄々をこねられると、かなりむかつく。筆者はまだ東海道新幹線が動いていたので、これで大阪に飛び、関空から帰ってほしかったのである。確実に被害が広がっていくなかで、一刻も早くトレンパーを無事に帰すには、その道しかないと思っていた。朝からお互い陰険である（苦笑）。「どうしても成田に行く」「いや、大阪に飛べ」。キレそうな筆者に母親が「この人が行きたいって言うんだから、連れてってあげれば」と。そこでトレンパーに「ダメでも文句言うなよ」と釘を刺し、昼に実家を出発。

案の定、成田エクスプレスはダメ。駅員さんに聞くと京成線なら動いている可能性がある。ひとまずまるで来ない電車を待ち、来たら来たで寿司詰め電車でいかいトランク持ってやりやり乗り込む。どうやらトレンパーは心に余裕が出てきたのか、軽口を叩き出す。なんとか日暮里に到着。彼のトランクは筆者が持っていたのだが、階段で同じように大きなトランクを持っている女性を見つけたトレンパーは軽々とそれを持ち、ニコニコして手伝ってあげている。筆者、キレる。「俺はポーターじゃねえんだよ」と怒鳴る。

京成線まで行くと、やはりダイヤはグチャグチャ。乗り継ぎ乗り継ぎで4時間くらいかければ空港にはつけるだろうけど、それで飛行機が飛んでるかはわからないと言われる。虚脱して駅の近くの喫茶店に逃げ込む。いよいよ本当のことを伝えるし

かあるまい。まあ、ゆるい方から説明していこう。まず、トレンパーに成田空港はそれなりに被害を受けた地域の海っぺりにあるのだと。あなたが怖がっている津波がもう一度来たらどうにもならんのだと。今ならまだ大阪に飛べ、そこからなら帰れると。しかしやはり成田に行きたいと難色を示すトレンパー。いや、行くのはいいけど空港で足止めくらったら同じような人たちでホテルも取れないしどうにもならないって。しょうがないので、空港近辺のホテルを友人に探してもらい、そこで泊まって明日空港へというのが決まりかけたのだが、ホテル全滅。一部屋もとれない。しょうがない。もう言うよ…。

「原子力発電所がね、壊れちゃった。でね、放射能が漏れてるみたいなんだ」。日暮里の場末の喫茶店で声をあげて泣く白人オヤジ。泣きたいのはこっちなんだな。「でね、我々が向かう空港は、ここよりも原発に近いんだ。どうする?」。まあ、どうするものもないんだが、ここでようやく大阪行きを承諾してくれる。初めから言うこと聞いてくれよな。一応、飛行機を確認しようと電話すると、とうとうつながった。そして「5日後の成田発に乗れるって!」と喜ぶトレンパー。その後、何かあった時にケアしやすいので横浜にホテルをとることにし、ようやく筆者は家に帰れたわけだ。トレンパーもさすがにこれだけ二人でいるのもしんどいだろうと「用があったら電話して。あとはのんびりどうぞ」と。

3日目、疲れがドッと出た筆者が目を覚まし携帯を見ると「今日の便が急遽取れた。いま空港にいる。またね」というメールと留守電が…。こうしてダディは無事に帰りましたとさ。まあ、世話していたおかげで筆者は余計なことを考えなくてすんだので、結果的には地震の恐怖もほとんどなかったのだが。ダディはこんな怖い思いをしたのに、8月にまた日本に来るそうです。とっぺんぱらりのぷう。